第170号(2000年7月)

調査と情報

編集・発行
㈱農林中金総合研究所基礎研究部
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-8-3
TEL. 03-3243-7331
FAX. 03-3246-1984
E-mail：kaneko@nochuri.co.jp

地球環境問題の難しさ

環境ホルモン（外因性内分泌撹乱化学物質）が広く知られ、たびたび語られるようになったのは、二十世紀末のここ数年である。従来公害等の汚染物質は、質量又は体積の百万分率（ppm）で語られたが、環境ホルモンは、さらに低濃度の十億分率（ppb）単位の極めて微量でも影響があると知り驚かされた。

しかも、その環境ホルモンの作用の発現には、極めて長期間を要し、その物質の作用の判定や明確化には非常な困難をともなうことなどに、重ねて驚く。それにもかかわらず今も多様な化学物質が新たに合成されるなど、次々と明らかにされる事実に戦慄さえ覚える。

加えて、人間の活動により環境ホルモンが、既に動植物に実害を与える程度に自然界に拡散し、食物連鎖によりその上位の動物の体内では何万倍にも濃縮しているという。

かつてレイチェル・カーソンの『沈黙の春』での警告には大いに不安を感じたが、実感は薄かったと思う。しかし、今日シーア・コルボーンらの『奪われし未来』やデボラ・キャドバリーの『メス化する自然』を読むとき、嫌でも現在の豊かな生活の享受の裏面にある大きな矛盾を感じる。

環境ホルモンのように、現在の直面している地球環境問題は、われわれが知らない間に、被害者であると同時に加害者になっているものが多い。また、環境ホルモンの作用が、その影響の発現までには長期間を要するように、気づいたときは最悪の状況に陥っている可能性がある。さらに、無添加食品や有機農産物を選択することによる回避手法、すなわち個々人の選択や回避の従来の手法が全く無力であることに大きな違いがある。

考えるとこれらは、われわれのエゴや不注意や行動しないことに内在して、事態をより深刻化している。環境問題についての意識啓発や単に理解と協力を求める時期は、もはや過ぎたといえる。今後われわれは、生産と消費の全過程を、地球環境の視点から見直すべきであろう。

貴重な天然資源の消費には制約や負担を強い、他方資源の再利用を優遇する。また、無害な太陽光や風力などの利用と環境汚染の回避を誘導し、厳しく強制するなどである。また、製造者や利用者をして、製造の当初から再利用や汚染と無縁な方法を考え行動することを動機づけるシステムを、社会経済の中に組み込むことであろう。

規制強化は、適切な技術がないとか、社会経済の沈滞を招くと批判されがちだ。しかし、『ファクター4――豊かさを二倍に、資源消費を半分に』（エルンスト・U・フォン・ワイツゼッカー、他）には、既実行のものや直ちに導入可能な優れた方法などが列記されている。他にも優良な方法があろうし、方法がないのではない。今や環境問題に取組む姿勢と決意こそが迫られている。

（理事研究員　道明　雅美）

今月のテーマ：漁業基本法策定にむけて

地球環境問題の難しさ……1
水産政策の課題……2
海洋汚染と残留農薬……3～4
水産加工業の現状……5～6
環境に配慮した魚類養殖技術への取組み…7～8
ぶっくレビュー『魚は人類を救えるか』……9
あぜみち……10
虹のかけ橋……11
統計の眼「食品製造業の海外直接投資の動向」…12
編集後記……12